

境 界

力と倫理の力学

國部 克彦 著

ワクチンの

ワクチンの境界

権力と倫理の力学

國部 克彦 著

978434310812

1920047016002

ISBN978-4-434-31081-2

C0047 ¥1600E

定価: 1760円

(本体1600円+税10%)

発行: Amazing Adventure

発売: 星雲社

る場合があります。たとえば、ワクチンをめぐる議論を突き詰めていくと、それは「自由」の問題だとして、議論が打ち切られてしまうことがあります。その典型が、「打つのも、打たないのも、その人の自由」という一見正しそうなロジックがあります。役所によるワクチンに関する説明文書も、基本的にこの主張をベースに構成されています。

ところで、本当に私たちにワクチンを打つ自由や、打たない自由はあるのでしょうか。もう一度、クリリフォードの「信念の倫理」を出してください。クリリフォードは、「軽々しく何かを信用して行動するのは悪である」と断言しています。しかも、信じることによつて、「疑問を封じこめたり、質問を妨害したりするものは、何世紀にもわたって決して消し去ることのできない冒瀆の罪を犯したことになる」とまで述べています。

クリリフォードに従えば、私たちは、ワクチンの内容を十分に調べることなく、軽々しく他人の意見を信じて行動する権利はない、ということになります。つまり、「打つのも、打たないのも自由」ではなく、十分に調べずにワクチンを「打つ自由はない」のです。私たちは、人類の義務として、自分が納得するまでは、行動してはいけないのです。なぜなら、すでに第1章で述べたように、それが誤っていたときに、何世紀にわたる害悪を残すだけでなく、たとえ結果的に正しかつたとしても、軽々しく信じてしまう習慣を強化することで、次の大きな間違いを犯しやすくなってしまうからです。

しかしそうすると、「接種しないで感染が増えたらどうするのか」という反論が出てくるかもしれません、そうなつて初めて議論が成立するのです。そこが討議の出発点です。この出発点にたどり着くことが、「自由」の名の下に制限されていることに、気づかなければなりません。

全体主義の本質が、自分で思考することなく、全体に合わせようとする人間の行動にあることはすでに指摘してきました。したがって、全体主義に抵抗するためには、行動の基準を全体に合わせるのではなく、自分自身に合わせないといけません。それが本来の自由であり、倫理的な態度です。

システムがもたらすリスクとそれに抵抗するための方法について論じてきました。その基本は、自分自身の気持ちに忠実に行動することです。世の中の「凡庸な悪」は相当に強力なので、それだけでは大海の中に浮かぶ小舟のような心細さを感じるかもしれません。そのときには、もっと具体的な倫理的な指針が必要になります。それを次章で考えましょう。

も認めないもの」⁵と定義しています。人の命を確率で評価することは、等価なものを認めることになるので、それだけが唯一の指針であれば、人間の尊厳を損なうことになります。

この問題は、見方を変えれば、少数の犠牲の上に、多数のための社会を築いてよいのかという問題でもあります。自分は絶対に少数にはならないであろうと思う人は、人間の尊厳について深く考えたことのない人です。今は、多数派に属している人も、いつかは必ず少数派になって、社会から去っていかなければなりません。そのときに最後まで人間として生きることができるのか、ここに人間の尊厳の本質が存在しています。

この問題に答えはありませんから、議論し続けなければなりません。議論を放棄すれば、犠牲にされる人の数が膨らんでいく危険性があります。それを阻止するのが、人間の倫理のはずです。香西氏も、「予防接種の実施には「必要性」のみならず、「有効性」・「安全性」そしてそれらの均衡を見据える「倫理性」の論点が欠かせない」⁶と主張します。

新型コロナワクチンに関するこれまでの議論を見れば、「有効性」や「安全性」の議論も非常に偏った形でしか行われておらず、「倫理性」の論点はほぼ完全に欠落しています。そし

⁵ イマニュエル・カント『道徳形而上学の基礎づけ』光文社古典新訳文庫、2012年、154ページ。
⁶ 香西「前掲論文」、88ページ。

て、そのことが「有効性」と「安全性」についても偏った議論を招いてしまっているのです。その意味で、「100分の1の倫理」が現代に投げかける意義は大変大きいものがあります。

命は比較できるのか

日本でも世界でも、ワクチンの安全性を、接種によって有害事象が発生する確率で評価しているようですが、これは正しいでしょうか。第1章でみたように、接種後の死亡数や重篤な副反応件数は相当数に上りますが、確率で見れば大変低いとも主張できます。これに対して、報告されていない実際の接種後死亡数はもっと多いとか、あるいは逆に接種後死亡の中で因果関係が判明しているものは一例もないとか、数をめぐる議論はいろいろありますが、最も根本的な倫理的な問題として、生命の問題を確率だけで議論してよいかどういう点は、ほとんど議論されていません。

「100分の1の倫理」の根底には、予防接種で健康な人間が一人でも死ぬべきではない、という思想があります。このように言うと、予防接種による死亡を交通事故の確率と比較して、だつたら自動車を廃止するのかと反論する人がいますが、それは比較する対象が全く違います。交通事故のリスクは、それを利用する目的とは何ら関係がありません。東京